

## 序章 研究の背景と目的、方法

日本庭園の形成に影響を与えた思想として蓬莱・神仙思想、仏教や禅が取り上げられてきた。これらの思想が日本庭園のなかに受容されてきたのは、もともとそれを可能にした素地がわが国にあって、それは「アニミズム」ではないかと考えている。アニミズムとは、人間以外の動物や植物といった生き物のみならず、山、石、道具などにも魂があるとみる精霊信仰で、世界中にあり、宗教の起源と考えられている。わが国はこの傾向が強い文化を有していると文化人類学や民俗学、宗教学の分野で考えられている。身近な例を挙げると、道具やものに名を付け供養をする習慣があることや、アニミズムそのものと言われる神道<sup>1</sup>が仏教伝来後もわが国に残り、現代まで信仰されていること等である。日本庭園とアニミズムの関係については重森三玲<sup>いむくら</sup>の磐座の研究などの他には直接的に論じたものが殆ど見られない。「日本庭園の底流にあるアニミズム」と題するこの一連の研究の目的は、日本の庭園の原初にアニミズムがあったとの仮説に立ち、その立証を試みることにあ  
る。先行論文<sup>2</sup>においては、先ずわが国の庭園の原初の姿を探った。

古代から古墳時代、さらに弥生・縄文時代のニワ状遺構まで遡ると、それは祭祀を主な目的としていたとみられる空間であったことから、わが国の庭園は、祭祀空間を起源に持ち、空間そのものが聖性と靈性を帯びた靈的なものを迎える場という性質を持っているのではないかと考えるに至った。天意を尋ね、祈り、祓い、時には呪いをかける祭祀が、湧水や自然河川のほとり、あるいは造園的に修景されたニワ状の親水空間で行われていた。その主な構成要素は「流れ」と「州浜」、そして「立石」であり、「流れ」と「州浜」は祭祀の執行に必要な場の造形であり、水際に「立石」を持つこともある。

祭祀空間としての造形は飛鳥時代に転換期を迎えたとみられ、庭内に「池を掘り、島を築く」ことがこの飛鳥時代に始まったとみられている。飛鳥時代における「池と島」はその後、州浜と立石を伴いながら、庭園の重要な構成要素となることから、本論文ではこの「島」を中心に上げ、わが国の「島」にアニミズム的な要素があるのか、あるとすればどのように認められるのか、それが庭園にどのように持ち込まれたのかを明らかにする

ことを目的とする。

「島」については、大陸から伝わった蓬莱三山などの神仙思想の影響がよく知られているが、もともと大陸で形成されたイメージとわが国に実際につくられたものとはやや趣きが異なって感じられ、そこにはわが国特有の事情や感性があったと考えられることから、わが国の庭園に実際に造形された「島」の形を、底辺に対する高さの比で検証してみると同時に、わが国で最も古い文書である『古事記』と『萬葉集』の一部、少し時代下って高陽院庭園や平等院庭園が造営された頃に成立したと見られている『作庭記』に表れる

「島」のイメージを抽出し、比較したところ、古くは「島」にはそれぞれ神が宿ると考えられていたことと、「島」と「國」と「州浜」、そして「庭」が混在することが注目せられた。さらにわが国では「島」と「州浜」が密接な関係にあることも見えてきた。

島の神を奉じた祭祀の事例として古代の難波津で行われていた<sup>やそしまさい</sup>八十島祭と、その島と州浜が織り成す風景をとりあげ、あわせてその独特の風景が平城宮東院庭園の州浜のモチーフとなった可能性も提起する。

## 第1章 祭祀空間の造形とそのモチーフ

わが国では縄文時代以来、湧水点や井戸、自然河川のほとり、あるいは人工的にしつらえた親水空間において祭祀が行われてきた。水に直接手が届く場所で行われ、そのために流れを誘導し、水際に州浜をつくり、あるいは石敷の平坦部と水に降りる階段をつくり、祭壇や建物と組み合わせることも行われてきた。また、流れの合流部に石を立てる立石も同時に行われている。このことは縄文時代後期半ばの遺跡である矢瀬遺跡や弥生時代前期後半から後期にかけての池上曾根遺跡、古墳時代の城之越遺跡などで明らかにされており、そこで行われていた祭祀は「水辺の祭祀」と総称され<sup>3</sup>、後の時代の作庭技術の初期段階がそれらの遺構にみられるとの見解は概ね受け入れられている。その造形の主な構成要素は「流れ」「州浜」そして「立石」である<sup>4</sup>。発掘されたニワ状遺構や庭園のこれらの構成要素を時代を追って一覧にしたのが（表1）である。

### 第1節 「流れ」の造形とそのモチーフ

「流れ」は縄文・弥生時代から古墳時代、飛鳥時代初期にかけて、自然河川に造作を加えたものや、湧水点から流れを引いて造形したものがあり（図1）、奈良時代にも平城宮の東院庭園などにつくられており、平安時代まで遣水として造形されていることから（図2）、何らかの重要な象徴であり、そのモチーフは『古事記』に記された「天の安河」（天の川）であり、太古の人々は湧水や流れによって天の安河にいる神々とつながることができると信じて祀りごとを行っていたのではないかと考えている。この点は立証には至っていないが、「流れ」の傍で祭祀が行われていたことは事実であり、当時の祀りごとは<sup>まつりごと</sup>「政」でもあったため、「流れ」が一種のステイタスシンボルとして庭園内に残されてきた可能性がある。「流れ」は弥生時代や飛鳥時代には「溝」に整形された例もある。「流れ」や「溝」は飛鳥時代まで造形の中心的な要素として存在し、奈良時代には池がつくられるようになってその給水路としての役目を担い、平安時代以降は遣水となって存続していく。

## 第2節 「州浜」の造形とそのモチーフ

わが国の河川や河口付近によく見られる州浜はニワ状遺構や庭園において自然風景と同じように造形された（図3）。本論文では緩やかな勾配をもつ玉石（自由礫、固定礫を問わない）に覆われた護岸を「州浜」と呼ぶことにする。弥生時代や飛鳥時代の祭祀空間においては石貼りの平坦面に整形された例（図4）もあり、本論文ではこれを「石敷」と呼ぶことにする。「石敷」は一見すると「州浜」と違って人工的な造形であるが、その役目は「州浜」と同じく、この場で聖水を汲み、流し、祭祀具を投じていた。奈良時代以降は祭祀の役目が薄くなり修景的要素が強くなったと見られ、「石敷」よりも自然風景と同じ「州浜」が主流となった。「州浜」は以降も護岸の手法として多くの庭園に用いられ、平等院庭園や毛越寺庭園などの園池の中島を含むほぼ全周が州浜であったことも発掘調査<sup>5</sup>により判明しており、このことは特筆に値する。そのモチーフはわが国の急峻な地形からほとぼしる河川が河口付近に礫を押し出していく地形であり、河川の兩岸や中州の周囲も同じく「州浜」と呼ばれる。「州浜」や「石敷」は、祭祀の場そのものであったのであり、湧水・流れとの組み合わせで「聖なる親水空間」を形成していたと言えるのではないだろうか。

## 第3節 「立石」の造形とそのモチーフ

この「流れ」と「州浜」で構成される「聖なる親水空間」には流れに臨む立石や石組みが存在する場合がある。流れ、池とは別の場に配置される石組みもある。立石の最も古い形としては縄文時代の遺構に環状列石としてみられるものや、墓標、境界、道標等があり、時代が下るにつれ、庭園内の造形的な構成要素になっていく。そのモチーフとしては第一に「山、山岳」が考えられる。平城宮東院の園池北岸の石組み（奈良時代）について、岩永省三が『古代庭園の思想』において、正倉院南倉宝物の「假山」<sup>6</sup>（図5）との相似を指摘している<sup>7</sup>。森蘊は『日本の庭園』で山岳を石組で表した例として、西芳寺洪隠山の山腹の石組（南北朝時代）等を挙げている<sup>8</sup>。大徳寺大仙院庭園の枯滝石組みと枯流れ

(室町時代)は深山から滝が流れ出て大河にそそぐ景としてよく知られている<sup>9</sup>。また江戸末期から継承されてきた津軽地方の大石武学流庭園に配置される「えんざんせき遠山石」は「深山石」とも言い富士山や岩木山に似た石が良いとされる<sup>10</sup>。これらのことから、山岳表現としての立石があることが理解できる。次に考えられるのが「島」であり、『作庭記』にある「磯島」は石を主体とする島の作り方である<sup>11</sup>。そして三つ目に「神仏」が考えられる。室町時代に書かれたと見られている『山水並に野形図』には「石之名」として「両界石、(中略)此石ハ両界ノ大日如来ヲ表ス五行五色ヲ具足スル石也、(後略)」<sup>12</sup>とある。同書には他にも「明王石」の名が見える。『作庭記』にも「三尊仏の立石をまさしく寝殿にむかふへからず、(後略)」<sup>13</sup>とあり、上原敬二『造園辞典』には三尊は仏教の釈迦、阿弥陀、不動を表し、神道では三神石、二神石となるとある<sup>14</sup>。石を神仏に見立てて庭中に据えることは平安時代から行われていたと考えられる。

石は古来、この世とあの世の間にあるものと考えられており、石にまつわる事象には靈性に関わるものが多い。『作庭記』は立石について靈性に関わる言い伝えや禁忌に多くの記述を費やしている他に、「石の乞はんにしたかひて」<sup>15</sup>という表現を用いており、この一文を多くの研究者や作庭家が「石の要求するところに従って・・・」と解釈していることから、現代人も石に意志があるという靈性を無意識に共有していると考えられる<sup>16</sup>。また、わが国の庭園が、「神々とつながる場」「靈的なものを迎える空間」という性質をもともっていたことが「立石」のような靈的なものを残しやすくしたのと考えている。

これらのことから、わが国の庭園の底流には今もそれと気付かぬほどに深いところで、アニミズムが流れていると言えるのではないだろうか。

## 第2章 祭祀空間の庭園化―「島」の出現

### 第1節 「島」の出現とその造形

『日本書紀』は養老4年(720)に完成した。その推古朝20年(612)の記録に、「是<sup>こ</sup>歳、百済国より<sup>と</sup>化<sup>く</sup>来る者有り。(中略)赤<sup>また</sup>臣<sup>やつ</sup>、小<sup>い</sup>なる才<sup>さ</sup>有り。能く山岳の形を構く。(中略)よりて須弥山<sup>すみのやま</sup>の形及び呉橋<sup>くれはし</sup>を南庭に構けと令す。時の人、その人を号<sup>なづ</sup>けて、路子工<sup>みちこのたくみ</sup>と曰ふ。亦の名は芝耆摩呂。」<sup>17</sup>とあり、ある百済からの渡来人が山岳の形を構くので、南庭に須弥の山と呉橋を築かせたとの記録である。「須弥山<sup>すみのやま</sup>」乃至「須弥山<sup>しゆみせん</sup>」は仏教で世界の中心をなすとされる山である。路子工はこの「山」を築いたのであるが、同時に「呉橋」ができていることから、その築山は周囲を掘削した土でつくられたもので、その結果、池中に島が出現したと推定できる。「呉橋」については上原敬二『造園辞典』でも「古事記に路子工(みちこのたくみ)が作ったものと記され庭園的なものらしいが詳細は不明。文字だけ残る。」<sup>18</sup>とあり、実態はわからない。森蘊は『日本の庭園』で「之を以て本邦庭園の主題として須彌山が採りあげられた最初であり、(後略)」<sup>19</sup>としている。この「山岳の形」や「須弥山」は元来が山岳のイメージであることに留意しておきたい。また推古朝34年(626)に蘇我馬子の薨伝があり、「大臣薨<sup>おほおみみう</sup>せぬ。(中略)以て三宝を忝<sup>も</sup>み敬<sup>さんぼう</sup>ひて、飛鳥河<sup>あすかがは</sup>の傍<sup>ほとり</sup>に家<sup>いへ</sup>せり、乃ち庭の中に小<sup>すなは</sup>なる池<sup>には</sup>を開<sup>なか</sup>れり。仍りて小<sup>い</sup>なる嶋<sup>いささか</sup>を池の中に興<sup>いけ</sup>く。故、時の人、嶋<sup>は</sup>大臣<sup>よ</sup>と曰ふ。」<sup>20</sup>とあり、蘇我馬子が自邸の敷地に池を掘り、島を築いたことから「島大臣<sup>しまおほみ</sup>」と呼ばれた話も記録されている。この池と島について、上原敬二は『造園大辞典』「島」の項で「小規模な池庭と思われるが時の人には珍しかったものに違いない。」<sup>21</sup>と書いている。『日本書紀』推古朝の記事や現在確認されているニワ状遺構・庭園(表1)の状況から庭園の「島」は飛鳥時代に造られ始めたものと考えられる。以下に平安時代までの「島」を持つニワ状遺構や庭園をいくつか列記する。これらは「島」と同時に「州浜・石敷」もあわせ持っている。( )は(表1)の番号である。

飛鳥京跡苑池遺構(22)は7世紀飛鳥時代のもので、大規模な園池は比較的直線部分が

多い形状で、池内にトンボ型の中島がある。護岸はいずれも垂直石積みである。『日本書紀』に記載のある「白錦御苑」<sup>しらにしきのみその</sup>と目されている<sup>22</sup>。

平城宮東院庭園（23）は8世紀（和同3年（710）～延暦3年（784）頃）奈良時代の庭園である。祭祀の跡は未確認で、鑑賞、饗応の役割が強くなった本格的日本庭園の始まりと見做されている。当初、飛鳥時代風の直線的な形の池と垂直石積み護岸であったものから、改修を経て優美な緩傾斜の州浜に囲まれた浅い池になり、中島がつくられた<sup>23</sup>。この庭園については後の章でも述べる。

平城京左京三条二坊宮跡庭園（25）は8世紀（天平20年（748）～天平勝宝8年（756）まで）奈良時代に造営された貴族の半公邸とみられる住宅庭園である。完成された日本庭園であり、屈曲する池の護岸は20～30cmの玉石を立て並べた仕様で、その外周が玉石敷で緩勾配をもつ。さらにその外周が礫敷である。護岸（立てた玉石）の内側も石張りになっている。要所に石組みが置かれており、流れのなかに岩島と出島がある<sup>24</sup>。一見すると州浜に囲まれた流れのように見える池である。

平等院庭園（34）は11世紀（永承7年（1052））平安時代に藤原氏が造営した。優美な州浜護岸の中島上に阿弥陀堂が立つ<sup>25</sup>。現在は創建時に近い姿で復元されている。

毛越寺庭園（35）は平安時代末期の作庭である。池の護岸はほぼ州浜になっており、12世紀の石貼りに覆われた中島を検出している<sup>26</sup>。併存する岩礁状の池中立石がある。<sup>ちちゅうりつせき</sup>

鳥羽離宮庭園（37）は11世紀、応徳3年（1086）平安時代後期から白河法皇により造営が始まった。都遷りのごとしと評されたわが国最大の離宮である。鴨川の水と湧水を利用した大規模な園池、護岸はほぼ全周が州浜によってつくられた。中島に寺院（城南寺）がある<sup>27</sup>。

以上「島」と「州浜・石敷」をあわせ持つニワ状遺構・庭園の例である。他に南紀寺遺跡（9）がある。また伝称徳天皇御山荘跡（31）は「島」だけを持つ。

## 第2節 「島」のモチーフとイメージ

## 第1項 外来文化の影響の程度について

わが国の庭園に「島」がつくられ始めた頃の外来文化の影響について触れておきたい。特に本論文が取り上げている「流れ」「州浜」「立石」「島」について、その起源やモデルが大陸や半島にあり、その影響を大なりとする論調には金子裕之、岩永省三、田中淡、小野健吉らの研究がある。一例を挙げると、平城宮東院庭園の下層園池に現れた蛇行溝について、金子、岩永両氏は『古代庭園の思想』で中国の行事であった曲水の宴のためにつくられた<sup>28</sup>と見ており、田中も毛越寺の遣水について、「中国庭園の初期的風格と日本古代庭園」で普朝王羲之の蘭亭の「流觴語曲水」につながるもの<sup>29</sup>としている。州浜については小野が『日本庭園の歴史と文化』でそのモデルを中国洛陽上陽宮の卵石護岸である<sup>30</sup>とし、岩永も『古代庭園の思想』で州浜のイメージの源泉として、奈良時代に入ってからのお像の州浜座や正倉院宝物の「假山」をあげ<sup>31</sup>大陸から伝わったと見ている。立石についても岩永が同書で東院庭園の園池北端の石組みが「假山」に似ている<sup>32</sup>と指摘する。田中は毛越寺庭園の立石について、やはり同論文で中国立峯の初期的風格を伝えるもの<sup>33</sup>としている。総体的な見方として、金子は「嶋と神仙思想」において平城宮東院庭園の呼称が「楊梅宮南池」であり中国南朝の伝統を取り入れていることから、この時期にわが国の園池が半島型から中国型に転換した<sup>34</sup>と見ている。少し時代の下る『作庭記』については、田中がその内容に中国の風水・関係分野の専門方術書の影響がみられること等から、到底日本の範疇に限定しえない<sup>35</sup>と同論文で述べている。

一方で、外来文化の影響を限定的とみる論調もあり、平城宮東院庭園の蛇行溝については奈良文化財研究所の高瀬要一は「これと同じような形をした蛇行溝は、韓国にもありませんし、中国にもないわけです。」<sup>36</sup>と報告しており、同研究所が主催した「古代庭園に関する調査研究」で「曲水の宴に関する問題」として討議され、高瀬、今江、他の諸氏より曲水の宴については本来が祓いの祭祀であり、宮廷内ではなく自然河川で毎年場所を変えて行われていたと見られることから、必ずしもそのための施設が庭園内に設けられたとは考えにくい等<sup>37</sup>の意見が出されている。このことは、わが国における曲水の宴の実態を再



考する必要があることを示唆している。州浜については、中村一が『風景をつくる』において東院庭園の州浜への改修を「自然風景の象徴的表現<sup>38</sup>」として「庭における日本風の誕生<sup>39</sup>」と評価し、これ以降（奈良時代以降）庭園が国風化したと見ている。州浜は急峻な地形と数多い河川をもつ日本列島で多くみられる地形であり、大陸、半島においては地形や気候も異なり、庭園内で実見されるものが上記の洛陽上陽宮の卵石護岸だけであることから、中村一と同意見である。森蘊は『日本の庭園』で須弥山、蓬莱三山、九山八海等の遺物を検証し、「要するに須弥山にせよ、蓬莱山にせよ、その思想の導来された上代に於いても日本庭園の形態の上に全く何等の影響も及ぼさず、（中略）一般の庭園に就てはほとんど影響がなかったといっても差支えなからう。」<sup>40</sup>との立場であり、先の中村一の『風景をつくる』の論調と一致する<sup>41</sup>。また、『作庭記』に援用された陰陽五行思想については、田中正大は『日本の庭園』で「単に説得力を増すように引用されたものに過ぎない」として「同書の重要性には預からない<sup>42</sup>」としており、田中淡とは異なるが、田中正大が言うように陰陽五行思想が『作庭記』の本質とは考えられず、修飾的なものではないだろうか。

このように、さまざまな指摘や論考は、そのわが国への影響度をどの程度に見るかという差であるが、庭園をみるまなざしとして、外来の文化文明の摂取を優先的にみるか、日本人の感覚で素直にみるかという違いはあるように思われる。庭園にあらわれた造形を、わが国に縄文時代以来行われてきた祭祀の記憶を受け継ぐものとし、そこに込められた古代の人々の自然観や風景観を探っていくと、その底流にあるアニミズムが見えてくる可能性はあると考えている。

## 第2項 古代中国における「島」―神仙島

庭園の「島」のモチーフは『列子 湯問編』に記載されている蓬莱三山の伝説であるとする説がある<sup>43</sup>。多田伊織によるとその概略は以下のような伝説である。

昔、渤海の東（渤海とは東方の海、東海とも扶桑海ともいう（現在の日本海に比定される））に五山を擁する神仙島が浮かんでいた。海に浮かんで漂うため、捕まえることがで

きない。巨鼈十五匹に命じて持ち上げさせ固定した。三匹で一山の負担である。ところがそこに巨人が来て巨鼈六匹を釣っていってしまったので、二山はまた漂流し北極海に沈んだ。残ったのは九匹が持ち上げる三山である。この三山を蓬莱山、方丈山または方壺山、瀛洲山えいしゅうと言う<sup>44</sup>。

この蓬莱三山あるいは神仙島は仙人が住む桃源郷とも不老不死の島とも言われ、仏教美術に描かれ、庭園のモチーフともなった。その実例としては、北魏の時代（A. D. 3 世紀）洛陽に、もと漢の武帝の庭園「天淵池」があった。これを華林園とし、世宗が蓬莱山をつくり、山上に僊人館せんじんかんを建て、竜船鷁首りゅうしゅうげきしゅにて遊んだとある<sup>45</sup>。もう一例は唐代の長安城大明宮太液池（泰液池）内に漸台と呼ばれる中島があり、この中島に蓬莱・方丈・瀛洲えいしゅうの三山があった（図 6）。この伝説はわが国にも伝えられた。その形象は正倉院南倉に納められた「仮山」（図 5）等に見ることができる。蓬莱・方丈・瀛洲えいしゅうは本来は山岳、垂直に高い独立峰であり、石神遺跡から出土した須弥山石の正面に刻まれた図柄も山岳である。推古天皇が命じて路子工が作ったのは「山岳の形やまをか かたち」をした「須弥の山（仏教の世界の中心をなすとされる山）」であって、同時に呉橋ができたのは、周囲を掘削して池とし、その発生土を流用して山形の島を築いたのであろう。

### 第 3 項 外来の「島」のイメージとわが国に実際に造形された「島」の違い

庭園に池を掘り島を築く造形は、『日本書紀』の推古朝の記事や現在確認されているニワ状遺構・庭園（表 1）の状況から飛鳥時代に始まったものと考えられる。土木工事としてはわが国でも古墳の築造が行われていたので珍しいものではなかったと思われるが、上原敬二は『造園大辞典』に「小規模な池庭と思われるが、時の人には珍しかったものに違いない」<sup>46</sup>と書いている。須弥山や正倉院宝物に見られる屹立する山岳様式は、あくまでも大陸由来のイメージであろう。「山岳」よりもむしろ「島」、厳密に言えば「池と中島」のほうが喜ばれたのではないか。わが国に至っては、山岳よりも島のほうがクローズアップされたと考えられる。それはわが国が大小の島々を国土とする島国であり、交通手段が限られていた当時、生活圏は海に近く、島は最も身近に感じる風景であり、同時に山と同

じく神が居るものとされていたからではないだろうか。この点、大陸では「蓬莱山」「方丈山」「瀛洲山」「崑崙山」等と山岳に名を付け、靈廟を建て神靈を祀るが、島そのものには固有名が見られない。

池の遺構と違い、築山は削平された場合は後代での検出が不可能になるので、断定はできないが、いくつかの遺構の発掘成果から推定すると下記のことが言える。数字は島の水平幅と垂直高（池底から頂点まで）の比である。

飛鳥京跡苑池遺構（22）の南池内で検出された中島は細長い十字に近い。調査主体はこれを「とんぼ型」と呼んでおり、築山は想定されていない。敷地の幅が狭く、あまり高い山は物理的に造成不可能である（図7）。

平城宮東院庭園（23）の上層園池時代の池には中島ができ、その幅は東西10m、南北8m、最も狭い幅で4.65m①、中島の高さは池底から50cm②、水平：垂直比は①：②としても1：0.11である<sup>47</sup>（図8）。また、北岸の石組みの水平：垂直比は1：0.2である<sup>48</sup>（図9）。

平等院庭園（34）の中島には壮麗な建物が建ったのであるが、北魏の華林園（洛陽）のような山上の僊人館とは違い、島は低平で水面に近い高さで建てられている（図10）。

毛越寺庭園（35）の大泉ヶ池のうち池中立石の立つ中島は、立石を正面に見る時の幅が14.5m、立石を通る最小幅が10m、平均幅12.3m①、立石頂点が池底から3.5m②、①：②の水平：垂直比は1：0.28である（図11）。大きい方の中島は、12世紀1期目の形状が西北西-東南東方向の長軸が35m、南北最大21m、平均28m①、中島周囲の池底からの高さ最大1.3m②であり①：②の水平：垂直比は1：0.05である（図12）<sup>49</sup>。

鳥羽離宮庭園（37）の北殿の庭園遺構には二つの島があり、一つは最大幅18m、池底からの高さ1mで、水平：垂直比は1：0.06である。二つ目は東西42m以上、南北最大幅15m①、池底からの高さ1.1m②で水平：垂直比は①：②をとっても1：0.07である<sup>50</sup>。

以上、7例を見ても、水平：垂直比は1：0.05～0.28の間である。正倉院南倉の「假山」は長径87cm①、短径45cm、径平均66cm、高さ31cm②で、水平：垂直比は①：②をと

っても1:0.46であることから、「仮山」の約二分の一の高さにとどまっていることになる。低平なものも多い。

これらのことから、わが国で「島」をつくるときに、屹立する山岳の景であった蓬莱三山や須弥山を意識したとは考えにくい。大陸の島は「山」を主体としていたが、わが国では山にはこだわらなかったのではないか。その違いはやはり国土の違いからくる風景観の違いだったのではないだろうか。

### 第3節 「島」の意味と「州浜」との不可分性

#### 第1項 国としての「島」—『古事記』

『古事記』は舒明朝元年（629）編纂開始、和同5年（712）奈良時代初期に完成したわが国で最も古い文書である。倉野憲司校注『古事記』<sup>51</sup>をテキストとして古代の人々の

「島」の概念やイメージを探ってみたところ、「シマ」は多くの箇所では「クニ」と密接に関係して使われており、またそれぞれの「シマ」には島名とは別の名前があることがわかる。（表2）はその「シマ」と「クニ」そして「名」の一覧である。一例を挙げると、伊邪那岐命と伊邪那美命の二神が御合をして「生める子は、<sup>あわぢ</sup>淡道の<sup>ほ</sup>穂の<sup>きわけ</sup>狭別島。次に伊豫の<sup>いよ</sup>二名の島を生みき。この島は、<sup>み</sup>身一つにして<sup>おもよ</sup>面四つあり。<sup>おもごと</sup>面毎に<sup>かれ</sup>名あり。故、伊豫國は<sup>えひめ</sup>愛比賣と謂ひ、<sup>さぬきの</sup>讃岐國は<sup>いひよりひこ</sup>飯依比古と謂ひ、<sup>あはの</sup>粟國は<sup>おおげつひめ</sup>大宜都比賣と謂ひ、<sup>とさの</sup>土佐國は<sup>たけよりわけ</sup>建依別と謂ふ。（下線筆者）」<sup>52</sup>とあり、「島」は神々から生まれた子であり、名を持っている。

全文中「シマ」は28ヶ所用いられ、漢字は「志麻」「斯麻」「嶋」「州」が当てられている。また「クニ」は「シマ」に付随または独立して用いられ、漢字は「久爾」「土」「國」「邦」が当てられている。

概観してみると「シマ」は海に囲まれた陸地、「クニ」はそこに存在する何らかの統治機能をもつ共同体のようなものと考えられる。したがって「シマ」は国土そのものである。国土のすべてが「シマ」の集まり、「シマ」で構成されていることも、日本列島をよく表している。そして、「シマ」には「愛比賣」「飯依比古」などの名があり、「クニ」がなくても

神々の子の名が与えられていることから、古代の人々は「シマ」そのもの、厳密に言えば土地そのものに神格があると考えていたと推測される。その島の神、土地の神は人や共同体以前にあって、岡田精司は「即位儀礼としての八十島祭」の中で「古代の人々は「クニ」を治めるには、その土地の神を掌握する必要があると考えていた。その土地の神のことを「<sup>くにだま</sup>国魂」と言い、土地の精霊のことである」<sup>53</sup>と述べている。これに従えば「愛比賣」「飯依比古」などは島の精霊の名とすることができるであろう。

注目すべきは伊邪那岐命と伊邪那美命の島生み（国生み）が一段落したところの「既に國を生み<sup>を</sup>竟へて」<sup>54</sup>の一文である。太安万侶の序文には「土を<sup>くに</sup>孕み島を産みし時を識り」<sup>55</sup>とあり、本文の伊邪那美命の一連の島を生むくだりでは「この<sup>やしま</sup>八島を<sup>さき</sup>先に生めるによりて、大八島國と謂ふ。」<sup>56</sup>といった表現になり、最後には「既に<sup>を</sup>國を生み竟へて」<sup>57</sup>となっており（引用文下線筆者）、この変化はそのまま「島」から「國」への変化を暗示していると考えられ、ここからも「島」と「國」の不可分な関係性がわかる。

一方、「ニワ」の用例を拾ってみると、意外に少なく、「堅庭」が固い地面、「庭津日神・庭高津日神」が屋敷を照らす日の神、「沙庭」は忌み清めた祭場、及び<sup>きにわ</sup>審神者の意、「<sup>おおにわ</sup>大廷」も同じく祭場、「<sup>やにわ</sup>家庭」は人家の庭、等である<sup>58</sup>。ただし、出現数は少ないが、ここには「ニワ」の要素・用法が既にすべて現れている。即ち、平たい地面、神事や祭事のための広場、住宅や建物に付随する庭、の三つである。しかし、次の第2項で述べるように『萬葉集』には新たに「ニワ」を「シマ」という用例が現れる。

## 第2項 庭としての「島」―『萬葉集』

『萬葉集』は宝亀11年（780）の完成、収集された和歌で最も古いものは仁徳天皇（313～399年在位）の皇后磐姫<sup>いわひめ</sup>の御製がある。雄略天皇（456～479年在位）の御製が最も多く、4世紀から8世紀のわが国の風景、情景を反映していると見ることができる。庭園を詠んだ歌も多く、前述の蘇我馬子邸は後に朝廷が接収し、持統天皇邸、草壁皇子邸として使用され、「<sup>しまみや</sup>嶋宮」と呼ばれた。その草壁皇子の亡き後、嶋宮を詠んだ歌が15首ある

<sup>59</sup>。

島の宮　<sup>まがり</sup>勾の池の<sup>はな</sup>放ち鳥　人目に戀ひて池に<sup>なつ</sup>潜かず（朱鳥3年（689）頃）

み立たしの　島の<sup>ありそ</sup>荒磯を今見れば　生ひざりし草生ひにけるかも（同上）<sup>60</sup>

等である（引用文（ ）内は筆者加筆）。水鳥、島、庭の主をなくして生い茂る草の情景であり、この庭園の所在は未だ特定されていないが自然風景を想像させる庭園である。特筆すべきは庭園全体を指して「シマ」を用いている例があり、

妹として　二人作りしわが<sup>しま</sup>山齋は　木高く繁くなりけるかも（神亀5年（728））

<sup>おし</sup>鴛鴦の住む　君がこの<sup>しま</sup>山齋今日見れば　馬酔木の花も咲きにけるかも（天平宝字2年（758）頃）<sup>61</sup>

等の用例である（引用文（ ）内は筆者加筆）。「シマ」には「島」「嶋」のほか「山齋」の漢字が当てられる。

この時代、庭園全体を「シマ」ということについてはいくつかの見解がある。『広辞苑』は【島・嶋】の項で「泉水、築山などのある庭園。林泉」と同時に「ある限られた地域。界限。」<sup>62</sup>を挙げており、現代でも縄張りの意味があることから、中村一は『風景をつくる』で「シマ」を縄文時代の生活圏としてのイメージであり、それは環境そのものであり、庭園はこれを縮図にし、一定の柵や垣で囲んだ空間であること<sup>63</sup>を庭園を指した理由として挙げている。また共著の尼崎博正は同書で、神仙島などを表現した島が庭園の主景となることから、「島が庭園の存在理由であったのでは」<sup>64</sup>と考えている<sup>65</sup>。また岸俊男によると「山齋」の表記は厳密には園内の亭をさし、中島の亭では写経が行われることがあった<sup>66</sup>。このことは中島が聖性をもっていたことを示すと考えられる。

### 第3項　「島」と「州浜」の不可分性―『作庭記』

平安時代後期の11世紀になると、池を掘り、中島をつくり、「海の景」を表すことが作庭の主流となっており、この頃に成立したとされる『作庭記』のなかの「島」を拾い出し分析したところ、「島」は「州浜」と密接に関係して用いられていた。『作庭記』は『古事記』や『萬葉集』と違い、作庭の専門書である。したがってそこに記述された「島」は庭園の構成要素としての「島」である。

萩原義雄『日本庭園学の源流『作庭記』における日本語研究』<sup>67</sup>によると「しま」が1例、「嶋」が14例、「島」が2例の17例である。当時用いられていた漢字はほかに「之万」「壘」「洲」「嶼」等がある。本論文がここで注目したのは「シマ」が「州浜」に変化あるいは「州浜」と混在する点である。「嶋姿の様々をいふ事 山嶋、野嶋、杜嶋、磯嶋、雲形、洲濱形、片流、干潟、松皮等也」<sup>68</sup>とあり（引用文下線筆者）、「洲濱」（他に「すわま」「すはま」の表記がある<sup>69</sup>）とあわせて形状そのものを用いて「片流れ様」「干潟様」「松皮様」としている。「島」のひとつの形態として「州浜」が挙げられているのである。上原敬二は『造園大辞典』の【島】の項で山に鳥が飛来する象形の「壘」の字を挙げ「もともと海中の山を島と称した、水上に出るものとて山形をするものにかぎる、低平では時に満潮では冠水する、多くの場合かかるものを州または低と呼んだ（引用文下線筆者）」<sup>70</sup>としており、山形なら島、低平なら州と区別しているが、萩原は社島と磯島だけに「島」があてられたことに注目し、「当代（『作庭記』が著された時代）における「島」の文字は、海中や水中に浮かぶ陸地を表現する語であり、俗字である「嶋」字の方が幅広い意味で用いられていたものといえよう」<sup>71</sup>と述べている（引用文（ ）内筆者加筆）。これらの研究から『作庭記』の著者は「嶋」の字を用いて山形をするものから州浜までを「嶋姿」いわば島のバリエーションとし、「島」の一形態として「州浜」を紹介したと考えられる。

### 第3章 庭園の国風化とそのモチーフ

#### 第1節 東院庭園にみる国風化

和同3年（710）に平城京遷都が行われ奈良時代になると飛鳥時代の直線的な護岸の造形からは一線を画し、柔らかい曲線の汀や緩やかな勾配をもつ州浜の園池が造られるようになった。その遷移がみられる遺構が和同3年（710）頃から延暦3年（784）頃まで造営された平城宮の東院庭園である。奈良文化財研究所による発掘調査によって、下層園池の下から最下層園池が検出された。（図11）のように、その形は直線からなる隅丸逆L字型で、護岸は玉石積みの垂直部と玉石貼りの勾配部および石積みのない部分を有していた。これにより造営が始まった時点では明日香村で多く確認されている半島風の方形・垂直石積み護岸の園池だったことが判明したのである。その後の改修により、養老4年（720）頃から神護景雲元年（767）頃までの間に汀線に出入りがつけられ出島ができる。池は浅くなり護岸は州浜になった。給水として蛇行する石張りの溝が、また排水側にも同様の意匠の蛇行する溝がつけられた（下層園池）。さらに2度目の改修が同年（767）頃から行われ、中島ができ、護岸から建物が張り出し橋が架けられ、築山と岬の石組みがなされ、池底は全面礫石敷、池の全周が州浜となった（上層園池）。延暦3年（784）頃長岡京遷都により廃絶した<sup>72</sup>。

この庭園では、飛鳥時代と違って緩やかな勾配を持つ「州浜」が用いられ、自然風景を彷彿とさせるものである。同様の州浜の意匠は左京三条二坊宮跡庭園などの奈良時代の多くの庭園で採用され、平安時代に続いている。それはわが国の自然風景の中でもとくに親しみのある「島」と「州浜」であったからこそ、当時の人々に素直に受け入れられたのではないだろうか。さらに「州浜」にはかつて祭祀が行われていた神聖な場という記憶が内在しており、また「島」はそれぞれ神格を持っており、両者があいまって「国土」としてのイメージをも形成していたと考えられるのである。その一例として古代の難波とそこで行われていた八十島祭を以下に取り上げる。



## 第2節 国風庭園のモチーフとしての難波津

「<sup>おおやしま</sup>大八洲」（日本列島）の古称として「<sup>やそしま</sup>八十島」がある。八は「数が多い」の意で、島がたくさんある、との意味であるが、地名として使われていたものの一つに現在の大阪一帯にあたる「八十島」がある。かつてこの一帯では「八十島祭」が行われていた。「八十島祭」とは、平安時代から鎌倉時代にかけて行われていた天皇の即位儀礼のひとつである。天皇の代替わりがあったときに、大嘗祭の翌年に一代一度執行された。また古代難波宮があったところでもある。その詳細は先ごろ出版された栄原永遠男・高島幸次『古代なにわの輝き』<sup>73</sup>に詳しい。以下に同『古代なにわの輝き』、八十島祭を研究した岡田精司の「即位儀礼としての八十島祭」<sup>74</sup>田中卓「八十島祭の研究」<sup>75</sup>等を参考文献としてその概略を示す。

高島らによると、八十島祭は記録上は『<sup>ごうけしだい</sup>江家次第』<sup>76</sup>の嘉祥3年（850）（平安時代）に初出するが、新たに始めたとの記載ではない。岡田によると、これ以前から行われていたと考えられ、祭祀において女官の役割が大きく、古いシャーマニズムを色濃く残していることから5世紀に遡る可能性もある<sup>77</sup>。少なくとも400年に渡って実施され、最後の記録は元仁元年（1224）（鎌倉時代）で、以降は廃絶している。

式次第の概略は、まず大量の供物を用意し、新天皇、女官らの100人近い一行が難波津に向かう。到着すると浜に祭壇を設け、女官が琴を弾く。<sup>おんぞ</sup>御衣が入った箱のふたを開け、揺り動かして衣に浜風を受ける。この衣は都に帰って後に天皇が身につけるものである。禊のあと多量の供物を海に投じて都に帰るというものである。この祭祀の目的については三つの説があり、一つは新天皇の禊・祓いであるとの説。二つ目は陰陽道に基づき天皇の災厄を人形に移して水に流す「難波の祓い」の一種としている。三つ目の岡田の説は「大八洲の御霊」を新天皇の衣に付着せしめ、全国土の支配者としての資格を得るものとしている。この説はよく知られており、支配者がその地域を完全に領有するためには、土地の精霊（国魂）をしっかりと掌握しなければならぬと信じられていたので、天皇が日本全土に君臨する為には、「大八洲の霊」を着けている必要があった<sup>78</sup>、というものである。実

際、この祭祀の祭神は、現在でも皇室が宮中に祀っている宮中八座のうちの二座である生島神・足島神（一対）であり、『古語拾遺』に「生島。是大八洲ノ靈。」<sup>79</sup>とある（下線筆者）。古代難波宮の所在地である上町台地北端にあった生國魂神社（大阪城築城の際に遷宮）の祭神がこの二神である<sup>80</sup>。後年、住吉大社によって実施場所が変更せられ、それに伴い祭神も住吉大社関連の祭神に変化した。

祭祀が行われた場所は田中卓によると「難波津の熊河尻」「河尻の島々（田蓑島、幣<sup>みなて</sup>島<sup>しま</sup>）」である。または現在の淀川の河口という言い方ができる。『住吉大神宮年中行事』に「八十嶋祭、難波河尻の嶋々に於いてこれを行わせらる。河尻とは淀川の下流なり。河中に嶋多く、田蓑島・御幣島の如き、皆これなり」とある<sup>81</sup>。また高島によると『袖中抄』<sup>82</sup>には「八十島巡り」という表現があり、特定の島を指すのではなく一帯の島々を指した可能性もあるとのことである。本来の場所は上記の如くであるが、平安時代末期に住吉社により実施場所を住吉代家浜に変更された。

現在の大阪の都市の位置はこの難波津—古代大阪湾の海上にあたる。かつては生駒山脈付近まで水面があり、河内湾であった。最新の研究によると、北側から淀川の三角州が発達し、大和川との堆積作用で陸地化が進み、江戸時代までは池（淡水化した潟湖）も残っていたが、最後は干拓により完全に陸地化した。現在の上町台地の東側には江戸時代まで河内湾・河内潟が広がっていたのである。「浪華古図」（図13 原図は東が上、北が左に描かれているものを北を上にして掲載した）は承徳2年（1098）に作成された大阪湾の地図を明治41年（1888）に模写したと伝わる図である。上町台地の東は潟湖がほぼ陸地化、西は大阪湾が砂堆化していく途上と見える。このような成り立ちの大阪には、中島、福島、池島などの「島」がつく地名が現在でも無数に残る。また「江」や「津」、「浜」も多く、河岸であっても「浜」という。その実態は「海上に盛り上がる、あるいは突き出る陸地」ではなく、海中に見え隠れしながら次第に大きくなる州浜に近い砂州、砂堆である。まさに「島」と「州浜」が混在する風景である。そして飛鳥時代の7世紀、上町台地の北端に難波宮（難波長柄<sup>なにわながら</sup>豊碕<sup>とよさき</sup>宮<sup>のみや</sup>）があった。

古代の難波には古くは5世紀から都がおかれた。応神、仁徳、履中、反正天皇、いわゆる河内政権が大阪平野南部に基盤をおいていたもので、墓群も大阪平野に築造された。百舌古市古墳群である。高島幸次<sup>83</sup>も、この頃から八十島祭の原型が始まったと見ている<sup>84</sup>。

大化元年（645）、大化の改新により政権は飛鳥から難波に遷都する。難波宮の造営はそれ以前から行われており、34年間使用し、天智朝6年（667）に近江大津に遷都した。これが前期難波宮である。その後白鳳元年（672）に壬申の乱が起こり飛鳥浄御原に遷都した。この時代、天武天皇は複都制を推奨していた。和同3年（710）、政権は奈良平城宮に遷都し奈良時代が幕を開ける。神亀元年（724）に即位した聖武天皇は奈良時代を開いた天武天皇を追慕してよく難波に行幸し、天平4年（732）頃、難波宮を再興する。これが後期難波宮である。

天応元年（781）に桓武天皇が即位すると難波宮は延暦3年（784）～同5年（786）にかけて解体され、長岡京に移築され、延暦12年（793）には都は廃止された。都、貿易港としての難波津の最盛期は5世紀から7世紀の間であり、八十島祭が史料に初出する嘉祥3年（850）にはすでに廃れており、祭祀の形式だけが受け継がれていたとされている。以上が八十島祭と難波宮の概略である。

これらの研究に触れて、本論文が注目したのは次の点である。第一に聖武天皇は難波に思い入れがあったこと、第二に聖武天皇が難波への行幸を繰り返した頃に平城宮では東院庭園の改修を行っていること、第三に難波で行われた祭祀の祭神を、現在でも皇室が宮中に祀っていることの3点である。

奈良に遷都後、平城宮東院庭園において比較的単純な逆L型であった最下層園池を改修したのは養老4年（720）頃から神護景雲元年（767）頃と見られ（下層園池）（図14右上）、この時期の神亀元年（724）に聖武天皇が即位している。聖武天皇は先述の如く天平4年（732）頃から難波宮の再興を始めている。この時期、東院の園池は汀線に出入りがつけられ、水深も浅くなり、州浜がつくられ始める。その用途が未確定となっている「蛇行溝」がつくられたのもこの時期である。退位は天平咸宝元年（749）である。その後の改

修工事は神護景雲元年（767）頃から延暦3年（784）頃の間である（上層園池）（図14右下）。一方、難波宮は同年（784）から同5年（786）にかけて解体されて長岡京に移築され、長岡京遷都とともに平城宮東院庭園も廃絶となった。

以上のように、聖武天皇の即位と難波宮再興の時期は、東院庭園の改修が行われた下層園池の時期と重なること、及び前述のように聖武天皇は難波に思い入れがあり東院庭園の改修の際には難波津の原風景があったことから、具体的には東院庭園の州浜のモチーフとして、当時の難波津を想定するものである。

この一帯は難波津のほか難波江、難波浦などと呼ばれていた。船が行き交うその風景とは、州浜とも島ともつかぬ陸地と水面が複雑に入り組んだ模様である。積もりはじめた砂堆が島となり、海面の上下によって姿を現したり沈んだりする。その様子はあたかも国土が出来上がっていく過程のように感じられ、国土生成の象徴のような場所でもあったと考えられる。そこに祀られていた神（生島・足島神）は現在でも宮中にも祀られていることから、当時の政権や後年の皇室が重要視していたことは十分に考えられる。後の時代まで天皇の即位儀礼が行われるステイタスの高い親水空間であったと考えられる。

## 結章 古代庭園の「島」と「州浜」にみるアニミズム

飛鳥時代以降、庭園が祭祀の目的を離れ、鑑賞や饗宴、慰安を主たる目的とする庭園化が進むと、かつての祭祀の記憶を持つ「流れ」は平安時代の寝殿造庭園や浄土式庭園に見られるような「遣水」となり、その造形は受け継がれながらも「海の景としての池と島」が主役になっていく。この池と島を縁取る形で奈良時代に顕在化した州浜は、平安時代になると平等院庭園をはじめとして庭園を特徴づける意匠として多くの庭園につくられた。これらの造形のモチーフの原点は何であったのか。それはやはりわが国の地形が生む独特の自然の風景であろう。日本列島の急峻な地形によって雨水は急流となり、平野部に降りて沿岸までくると州浜をつくる。それは国土が生成する過程の風景そのものであり、古代の人々にとっては「島」と「州浜」は、明確に区別してもちいるものではなく、日本国の古称が「大八洲・大八島」であることから、どちらも国土のイメージを持っていたのではないかと考えられる。「洲」の字は「水中に砂が高くもりあがってできた島」とあり<sup>85</sup>、「州」の字は「洲」の書き変え字で「川に囲まれた中州を象った字」であり、古代中国でもこの字は行政区や「くに」を表す<sup>86</sup>。古代から近世にかけての難波津のように、州浜は国土が形成されていくイメージを彷彿とさせる。そこでは祭祀が行われ、ある程度陸地化すると中島となり、中島となれば人も住み、国の一部となった。また州浜や中島は、海路に直結する交通の要衝ともなり、経済的に重要な場でもあったと言える。そして「島」には古来より神格があって、その國魂を祀ることは<sup>まつりごと</sup>政としても重要だった。現代まで皇室が宮中に八十島祭の祭神（生島、足島＝大八洲の御霊）を祀っていることからその一端が窺える。古墳時代から政権や後の宮中の庭に「島」や「州浜・石敷」がつくられてきたのは、それゆえではないだろうか。

『古事記』のはじめに、「故、二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろして<sup>か</sup>畫きたまへば、鹽<sup>しお</sup>こをろこをろに<sup>か</sup>畫き鳴して引き上げたまふ時、その矛の末より<sup>ほこ</sup>垂り落つる鹽<sup>しお</sup>、累<sup>かさ</sup>なり積もりて島と成りき。」<sup>87</sup>とある。この描写は海中に州浜や島ができる様子を実に素朴に神話の中に映している。「州浜」は「島台」（図 15）となって慶事に添えら

れ、州浜紋とよばれる文様にもなり（図 16 左）、天皇だけが着用できる「こうろぜんのごほう黄櫨染御袍」にも織りこまれ（図 16 右）、即位式にはこの装束が用いられる<sup>88</sup>。これらのことから「州浜」は吉祥のモチーフであり、その理由は土地が（国土が）広がってゆく場であることと関連があるのかもしれない。

「なにわ」の語に込められていたものは何だったのか。『日本書紀』神武天皇の条には神日本磐余彦天皇（後の神武天皇）が東征し、九州から瀬戸内海を通して現在の大阪に至ったときのことを記してこうある。

まさ なにわさき方に難波碕に到るときに、はや なみ奔き潮有りてはなは はや太だ急きにあ会ひぬ。因りて、なづ なみはやの名けて浪速  
くに国とす。またなみはな い亦浪花と曰ふ。今、なにわ い難波と謂ふはよこなま訛れるなり。<sup>89</sup>

もとは「なみはや（浪速）」「なみはな（浪花）」だったが、訛って「なにわ」になったとし、書紀自体が「なにわ」を採用している。高島らによると他に「なにわ」には「なみにわ（波庭）」「なにわ（魚庭）」等の諸説がある<sup>90</sup>。難波の字にとらわれずに音に注目すれば、「な」と「にわ」である。「にわ」はやはり太古に斎場であったところの「にわ」「さにわ」と同義と考えられる。「なにわ」は、当時の政権が神託を受けてまつりごとを行う朝廷としての「にわ」であり、その風景は「島」とも「州浜」とも呼ばれ、祭祀と為政の両面をあわせ持つ聖なる親水空間である。平城宮東院庭園の二度の改修には、この「島」と「州浜」の難波津の風景が原風景としてあり、池と州浜のモチーフとなった可能性がある。「島」と「州浜」が織り成すその風景には、太古より島の神を祀り、祭祀を行った古いアニミズムの記憶も織り込まれていると考える。

本論文作成にあたり、図版・写真掲載の許可を頂いた、（公財）伊賀市文化都市協会、毛越寺事務所、文化庁平城宮跡管理事務所、奈良県立橿原考古学研究所、（一社）日本公園緑地協会、（独）奈良文化財研究所、大阪天満宮文化研究所、（株）岩波書店、（株）小学館、風俗博物館、以上（掲載順）の各機関、担当諸氏に厚く御礼申し上げます。

（18, 689 字）

- <sup>1</sup> 梅原猛「アニミズム再考」『日本研究』国際日本文化研究センター紀要、1989年、p. 14。佐々木俊道「『日本のアニミズムの現代』について」『日本文化研究 第八号』駒沢女子大学日本文化研究所紀要、2009年。その他。
- <sup>2</sup> 高宮さやか「日本庭園の底流にあるアニミズム」修士論文、2020年。
- <sup>3</sup> 日本考古学協会『シンポジウム1 水辺の祭祀』日本考古学協会1996年度三重大会三重県実行委員会、1996年、p. 214。
- <sup>4</sup> 高宮さやか前掲論文(2)。
- <sup>5</sup> 仲隆裕「史跡名勝 平等院庭園における州浜整備」『造園技術報告集』No. 2、日本造園学会、2003年。  
岩手県平泉町教育委員会『毛越寺庭園発掘調査報告書』岩手県平泉町教育委員会、1985～1989年。  
杉本宏「平等院庭園の整備」『日本庭園学会誌』16、2007年。
- <sup>6</sup> 正倉院南倉が所蔵する宝物で「スギ材で作った州浜の上に朽木を立て、彩色を加え銀製の樹木を植え込んで海中山岳をあらわす。」岩永省三「奈良時代庭園の造形意匠」金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店、2002年、p. 122より。
- <sup>7</sup> 岩永省三「奈良時代庭園の造形意匠」金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店、2002年、pp. 122-123。
- <sup>8</sup> 森蘊『日本の庭園』河原書店、1950年 p. 80。
- <sup>9</sup> 相賀徹夫『探訪日本の庭6 京都(二) 洛中・洛北』小学館、1979年、カラーp. 22。
- <sup>10</sup> 青森県弘前市教育委員会『大石武学流庭園群名称調査報告書』青森県弘前市教育委員会、2019年、p. 24。  
(株)環境事業計画研究所『平成29年8月「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」文化財庭園保存技術 研修報告書—成田家庭園・対馬家庭園・丹藤家庭園・須藤家庭園—』文化財庭園保存技術者協議会、2017年、p. 5。
- <sup>11</sup> 上原敬二『解説山水並に野形図・作庭記』加島書店、1982年、p. 55。
- <sup>12</sup> 上原前掲書(11)、p. 27より引用。
- <sup>13</sup> 上原前掲書(11)、p. 64より引用。
- <sup>14</sup> 上原敬二『造園大辞典』加島書店、1978年、p. 110 三尊石の項。
- <sup>15</sup> 上原前掲書(11) p. 55より引用。
- <sup>16</sup> 高宮前掲論文(2)。
- <sup>17</sup> 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀(四)』岩波書店、1995年、p. 124より引用。
- <sup>18</sup> 上原前掲書(14) p. 78「呉橋」の項より引用。
- <sup>19</sup> 森前掲書(8)、p. 86より引用。
- <sup>20</sup> 坂本他前掲書(17)、p. 148より引用。
- <sup>21</sup> 上原前掲書(14) p. 385より引用。
- <sup>22</sup> 奈良文化財研究所『奈良文化財研究所学報第74冊 古代庭園研究I』奈良文化財研究所、2006年、p. 245。
- <sup>23</sup> 奈良文化財研究所前掲書(22)、pp. 257-262、pp. 343-354。
- <sup>24</sup> 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所、1986年。
- <sup>25</sup> 奈良国立文化財研究所『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所、1998年、p. 70。
- <sup>26</sup> 平泉町教育委員会『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第13次調査— 岩手県平泉町文化財調査報告書第26集』平泉町教育委員会、1991年。
- <sup>27</sup> 古代学協会・古代学研究所編集『平安京提要』角川書店、1994年、長宗繁一・鈴木久男

---

執筆部。

- <sup>28</sup> 岩永前掲書(7) pp. 103-106。金子裕之「嶋と神仙思想—7～9世紀の庭園の系譜—」『道教と東アジア文化』13巻、国際日本文化研究センター、2000年、p. 168。
- <sup>29</sup> 田中淡「中国庭園の初期的風格と日本古代庭園」『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会』報告書』奈良文化財研究所遺跡整備室、2009年、p. 65。
- <sup>30</sup> 小野健吉『日本庭園の歴史と文化』吉川弘文館、2015年。
- <sup>31</sup> 岩永前掲書(7)、p. 114。
- <sup>32</sup> 岩永前掲書(7)、p. 122。
- <sup>33</sup> 田中前掲論文(29)、p. 65。
- <sup>34</sup> 金子前掲論文(28)、p. 168、p. 173。
- <sup>35</sup> 田中前掲論文(29)。
- <sup>36</sup> 奈良文化財研究所前掲書(22)、p. 259、p. 347より引用。
- <sup>37</sup> 奈良文化財研究所前掲書(22)、p. 25、pp. 19-29、p. 440。
- <sup>38</sup> 中村一・尼崎博正『風景をつくる』昭和堂、2001年、p. 24。
- <sup>39</sup> 注38に同じ。
- <sup>40</sup> 森前掲書(8)、pp. 95-96。
- <sup>41</sup> 中村・尼崎前掲書(38)、p. 20。
- <sup>42</sup> 田中正大『SD選書23 日本の庭園』鹿島出版会、1967年、p. 80。
- <sup>43</sup> 多田伊織「ニワと王権—古代中国の詩文と苑」金子編前掲書(7)、p. 209。
- <sup>44</sup> 小林信明『新釈漢文大系第22巻列子』明治書院、1967年、p. 215より。
- <sup>45</sup> 入矢義高 森鹿三訳『中国古典文学大系第21巻 洛陽伽藍記・水経注(抄)』平凡社、1974年、p. 21。
- <sup>46</sup> 上原前掲書(14)、p. 385より引用。
- <sup>47</sup> 奈良文化財研究所前掲書(22)、p. 345。
- <sup>48</sup> 奈良文化財研究所前掲書(22)、p. 346。
- <sup>49</sup> 平泉町前掲書(26)、p. 17、p. 36。
- <sup>50</sup> 古代学協会・古代学研究所編集『平安京提要』角川書店、1994年、p. 558。
- <sup>51</sup> 倉野憲司校注『古事記』岩波書店、1991年。
- <sup>52</sup> 倉野前掲書(51)、pp. 22-23より引用。下線は筆者加筆。
- <sup>53</sup> 岡田精司「即位儀礼としての八十嶋祭」山折哲雄・宮本袈裟雄編『日本歴史民俗論集9』吉川弘文館、1994年。
- <sup>54</sup> 倉野前掲書(51)、p. 24より引用。
- <sup>55</sup> 倉野前掲書(51)、p. 13より引用。
- <sup>56</sup> 倉野前掲書(51)、p. 23より引用。
- <sup>57</sup> 倉野前掲書(51)、p. 24より引用。
- <sup>58</sup> 倉野前掲書(51)、pp. 24-231。
- <sup>59</sup> 佐竹秀雄『庭と萬葉集』トライ、1998年。
- <sup>60</sup> 佐竹前掲書(59)。( )は筆者加筆。
- <sup>61</sup> 佐竹前掲書(59)。( )は筆者加筆。
- <sup>62</sup> 新村出編『広辞苑第二版補訂版』岩波書店、1976年。
- <sup>63</sup> 中村・尼崎前掲書(38)。
- <sup>64</sup> 中村・尼崎前掲書(38)、p. 133。
- <sup>65</sup> 尼崎博正談。2020年9月、於京都芸術大学研究会。
- <sup>66</sup> 岸俊男『日本古代文物の研究・嶋雑考』塙書房、1988年。
- <sup>67</sup> 萩原義雄『日本庭園学の源流『作庭記』における日本語研究』勉誠出版、2011年。谷村家所蔵版を底本とする。
- <sup>68</sup> 萩原前掲書(67)、p. 12。下線は筆者加筆。
- <sup>69</sup> 萩原前掲書(67)、p. 150。



- 
- <sup>70</sup> 上原前掲書(14)、p. 384 より引用。下線は筆者加筆。
- <sup>71</sup> 萩原前掲書(67)、p. 151 より引用。
- <sup>72</sup> 奈良文化財研究所前掲書(22)、pp. 257-262、pp. 343-354。
- <sup>73</sup> 栄原永遠男・高島幸次『古代なにわの輝き 天皇と大阪～象徴としての八十島祭』産経新聞大阪本社、2020 年。
- <sup>74</sup> 岡田前掲論文 (53)。
- <sup>75</sup> 田中卓「八十島祭の研究」『神社と祭祀 田中卓著作集 11-1』国書刊行会、1994 年。
- <sup>76</sup> 関白藤原師通の命により大江匡房が記録した朝廷行事の詳細、いわば平安時代の有職故実書。1111 年成立。
- <sup>77</sup> 岡田前掲論文 (53)。
- <sup>78</sup> 岡田前掲論文 (53)。
- <sup>79</sup> 「古語拾遺 神代」塙保己一『群書類従・第二十五輯雑部』続群書類従完成会、1933 年、p. 7。
- <sup>80</sup> 高島前掲書 (73)。
- <sup>81</sup> 田中卓前掲論文 (75) pp. 226-231。
- <sup>82</sup> 平安時代末期、文治年間の歌学書。
- <sup>83</sup> 昭和 24 年、大阪生まれ。専門は日本近世史・天神信仰史。大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所員兼務。平成 24 年大阪市市民表彰（文化功労）。高島前掲書 (73) より。
- <sup>84</sup> 高島前掲書(73)、p. 54。
- <sup>85</sup> 諸橋轍次・渡辺末吾・鎌田正・米山寅太郎著『新漢和辞典（四訂版）』大修館書店、1975 年、p. 490。
- <sup>86</sup> 諸橋他前掲書 (85)、p. 275。
- <sup>87</sup> 倉野前掲書(51)、p. 20 より引用。
- <sup>88</sup> 高宮前掲論文(2)。
- <sup>89</sup> 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（一）』岩波書店、1994 年、p. 204 より引用。
- <sup>90</sup> 栄原・高島前掲書 (73)、p. 6。

参考文献（順不同）

中村一・尼崎博正共著『風景をつくる』昭和堂、2001 年

本中眞「平城宮東院庭園に見る意匠・工法の系譜について」『造園雑誌』55（5）、日本造園学会、1992 年

金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店、2002 年

金子裕之「宮廷と苑池」

岩永省三「奈良時代庭園の造形意匠」

多田伊織「ニワと王権—古代中国の詩文と苑」 他

金子裕之「嶋と神仙思想—7～9 世紀の庭園の系譜」『道教と東アジア文化』13 巻、国際日本文化研究センター、2000 年

田中淡「中国庭園の初期的風格と日本古代庭園」『東アジアにおける理想郷と庭園—「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」報告書』奈良文化財研究所遺跡整備室、2009 年

小野健吉『日本庭園の歴史と文化』吉川弘文館、2015 年

田中正大『SD 選書 23 日本の庭園』鹿島出版会、1967 年

岸俊男『日本古代文物の研究・嶋雑考』塙書房、1988 年

森蘊『日本の庭園』河原書店、1950 年

上原敬二『解説山水並に野形図・作庭記』加島書店、1982 年

上原敬二『造園大辞典』加島書店、1978 年

相賀徹夫『探訪日本の庭 6 京都（二）洛中・洛北』小学館、1979 年、カラーp. 22

奈良国立文化財研究所『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所、1998 年

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所学報第 74 冊古代庭園研究 I』、（独）奈良文化財研究所 2006 年

日本考古学協会三重県実行委員会『シンポジウム 1 水辺の祭祀』、日本考古学協会三重県実行委員会 1996 年

平泉町教育委員会『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第 13 次調査—岩手県

平泉町文化財調査報告書第 26 集』平泉町教育委員会、1991 年

古代学協会・古代学研究所編集『平安京提要』角川書店、1994 年

仲隆裕「史跡名勝 平等院庭園における州浜整備」『造園技術報告集』No. 2、日本造園学会、2003 年

杉本宏「平等院庭園の整備」『日本庭園学会誌』16、2007 年

杉本宏「鳳凰堂阿弥陀浄土図と平等院庭園」『日本庭園学会誌』3, 2-9、1995 年

入矢義高・森鹿三訳『中国古典文学大系第 21 巻洛陽伽藍記・水経注（抄）』平凡社、1974 年

小林信明『新釈漢文大系第 22 巻列子』明治書院、1967 年

佐藤昌『中国造園史 上巻』日本公園緑地協会、1991 年

倉野憲司校注 『古事記』岩波書店、1991 年

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 『日本書紀（一）』岩波書店、1994 年

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 『日本書紀（四）』岩波書店、1995 年

佐竹秀雄 『庭と萬葉集』トライ、1998 年

新村出編 『広辞苑第二版補訂版』岩波書店、1979 年

諸橋轍次・渡辺末吾・鎌田正・米山寅太郎著『新漢和辞典（四訂版）』大修館書店、1975 年

萩原義雄『日本庭園学の源流『作庭記』における日本語研究』勉誠出版、2011 年

栄原永遠男・高島幸次 『古代なにわの輝き 天皇と大阪～象徴としての八十島祭』産経新聞大阪本社、2020 年

岡田精司「即位儀礼としての八十嶋祭」山折哲雄・宮本袈裟雄編『日本歴史民俗論集 9』吉川弘文館、1994 年

田中卓「八十嶋祭の研究」『神社と祭祀 田中卓著作集』国書刊行会、1994 年

榎村寛之「斎宮と水の祭祀」日本考古学協会三重県実行委員会『シンポジウム 1 水辺の

祭祀』、日本考古学協会三重県実行委員会、1996 年

尚学図書『文様の手帖』小学館、1987 年

梅原猛「アニミズム再考」『日本研究』国際日本文化研究センター紀要、1989 年

佐々木俊道「『日本的アニミズムの現代』について」『日本文化研究 第八号』

駒沢女子大学日本文化研究所紀要、2009 年

岩田慶治『草木虫魚の人類学』（株）講談社、1991 年

高宮さやか「日本庭園の底流にあるアニミズム」学位（修士）論文、2020 年

## 図版一覧

(表 1) ニワ状遺構・庭園 構成要素一覧

(図 1) 流れ (城之越遺跡)

(図 2) 遣水 (毛越寺庭園)

(図 3) 州浜 (平城宮東院庭園)

(図 4) 石敷 (飛鳥京苑池遺構北池) 出典：奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第 13 次調査 (飛鳥京跡第 182 次調査) 現地説明会資料」

(図 5) 仮山 (正倉院宝物)

(図 6) 古代中国の蓬莱三山 出典：佐藤昌『中国造園史上巻』「漢建章宮 太液池図」  
国会図書館蔵・陝西通志所蔵、(社) 日本公園緑地協会

(図 7) 飛鳥京跡苑池遺構南池の中島 出典：奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第 8 次調査 (飛鳥京跡第 174 次調査) 現地説明会資料」

(図 8) 平城宮東院庭園 上層園池の中島 出典：奈良文化財研究所『古代庭園研究 I』

(図 9) 平城宮東院庭園 上層園池北岸の石組み

(図 10) 平等院庭園 検出遺構の概略図 出典：奈良国立文化財研究所『発掘庭園資料』

(図 11) 毛越寺庭園 池中立石 出典：平泉町教育委員会『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第 13 次調査』

(図 12) 毛越寺庭園 中島 (1 期目) 出典：平泉町教育委員会『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第 13 次調査』

(表 2) 『古事記』にみる島と國と名

(図 13) 古代の難波 出典：「浪華古図」大阪天満宮御文庫蔵

(図 14) 東院庭園の変遷 出典：奈良文化財研究所『古代庭園研究 I』

(図 15) 島台 (州浜台) 出典：新村出編『広辞苑第 2 版補訂』

(図 16) 州浜形と黄櫨染御袍の州浜紋 出典：尚学図書編『文様の手帖』、風俗博物館 HP

※出典の記載なきは筆者作成・作画・撮影

表 1) ニワ状遺構・庭園 構成要素一覧

時代 (世紀)	古墳時代				飛鳥時代			奈良時代		平安時代			鎌倉
	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
	239卑弥呼特使毛渟遣 崇神天皇即位				581隋 118唐			710平城京遷都		794平安京遷都			『作庭記』成立
大陸					581隋 118唐					960宋			
半島	330高麗・百濟・新羅の三国				676統一新羅					936統一高麗			
遺構・庭園	保久良神社跡座												
	6)藤江別所遺跡(祭祀遺構)												
	3)下市瀬遺跡-1						3)下市瀬遺跡-2						
	11)六太A遺跡												
	4)纏向遺跡												
	15)屋代遺跡												
	13)中溝・深町遺跡												
	5)布留遺跡												
	7)城之越遺跡												
	10)飯原飯戸遺跡												
	9)南紀寺遺跡												
	8)南郷大東遺跡												
	12)天白磐座遺跡												
	14)三ツ寺 I 遺跡												
	16)上之宮遺跡												
17)古宮遺跡													
18)島庄遺跡													
21)酒船石遺跡(亀形・小判型石遺物出土)													
22)飛鳥京跡苑池遺構													
19)石神遺跡(須弥山石・石人像出土)													
20)平田キリヲ遺跡(猿石出土)													
23)平城宮東院庭園													
30)平城京左京一条三坊十五・十六坪庭園遺跡-1期(古墳周濠)													
26)長屋王邸													
24)佐紀池													
平城京左京三条二坊宮跡庭園25)													
28)法華寺阿弥陀浄土院													
29)法華寺旧境内													
31)伝称徳天皇御山荘跡													
32)下賀茂神社													
33)神泉苑 800年～													
38)嵯峨院(大覚寺)													
39)河原院													
40)高陽院													
41)東三条殿													
34)平等院庭園 1052年～													
37)鳥羽離宮 1086年～													
『作庭記』													
35)毛越寺庭園													
36)無量光院庭園													
水源	湧水	井戸	湧水	井戸	湧水	井戸	湧水	井戸	湧水	井戸	湧水	井戸	
流水	流れ	溝	流れ	溝	流れ	溝	流れ	溝	流れ	溝	流れ	溝	
徒歩	州浜	石敷	州浜	石敷	州浜	石敷	州浜	石敷	州浜	石敷	州浜	石敷	
池	池の形	池護岸	池の形	池護岸	池の形	池護岸	池の形	池護岸	池の形	池護岸	池の形	池護岸	
景石													
他	土坑	橋	中島										
祭祀遺物	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
建物	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	

・横帯は遺構・庭園が稼働していたとみられる期間の概略（祭祀に限らない）

※紙面の都合上、縄文時代～弥生時代に稼働した遺構を省略する。本文中の矢瀬遺跡がこれにあたる。



(図 1) 流れ（城之越遺跡）写真 筆者撮影 平成 30 年 7 月



(図 2) 遣水（毛越寺庭園）写真 筆者撮影 平成 30 年 7 月





(図3) 州浜（平城宮東院庭園） 写真 筆者撮影 令和1年11月

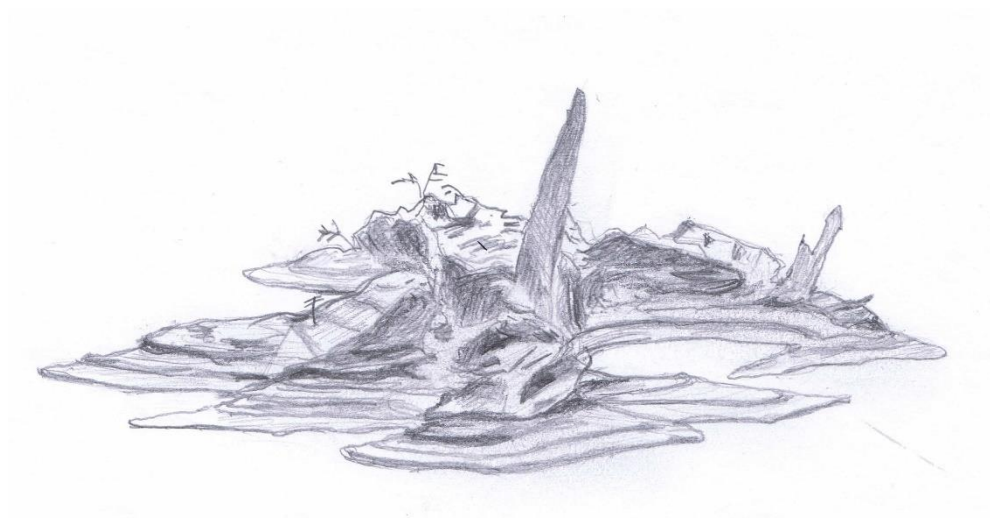


(図4) 石敷（飛鳥京苑池遺構北池）

出典 奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第13次調査

（飛鳥京跡第182次調査）現地説明会資料」より転載

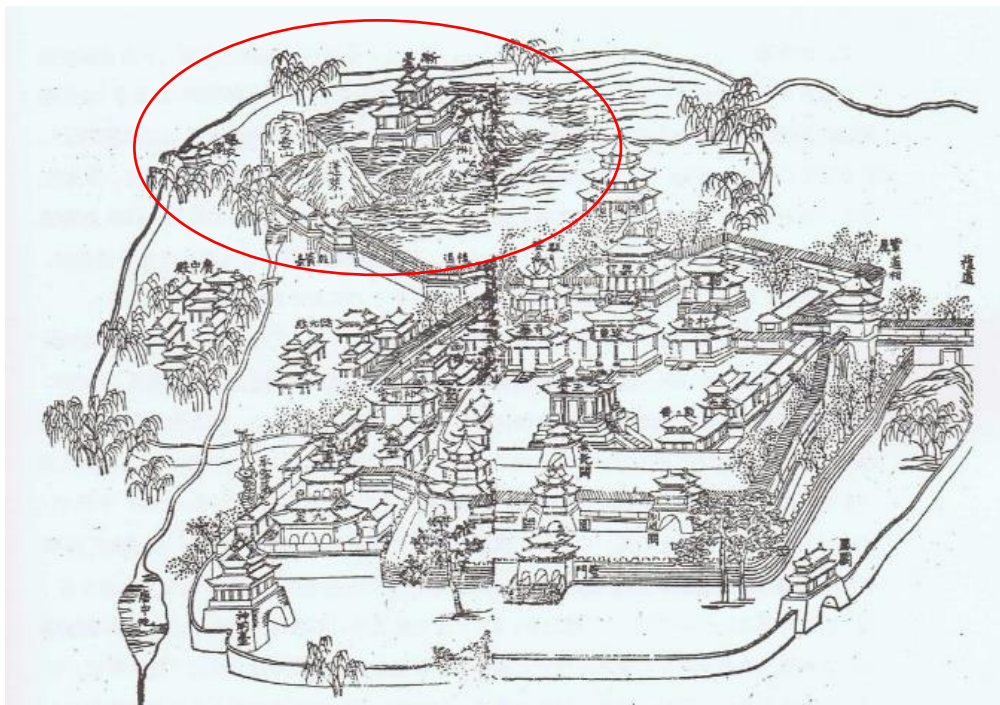




(図 5) 假山

正倉院宝物 南倉 174 宮内庁HP <https://shosoin.kunaicho.go.jp>

(2020 年 8 月 13 日検索) より筆者作画



(図 6) 古代中国の蓬莱三山

出典：佐藤 昌『中国造園史 上巻』「漢建章宮 太液池図」 国会図書館蔵、陝西通志所蔵

(社) 日本公園緑地協会 1991 年 より転載 赤線筆者加筆



(図 7) 飛鳥京跡苑池遺構 南池の中島

出典：奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第 8 次調査

(飛鳥京跡第 174 次調査) 現地説明会資料」より転載





中島



図9 石組み

(図8) 平城宮東院庭園 上層園池の中島

出典：奈良文化財研究所『古代庭園研究Ⅰ』2006年より転載

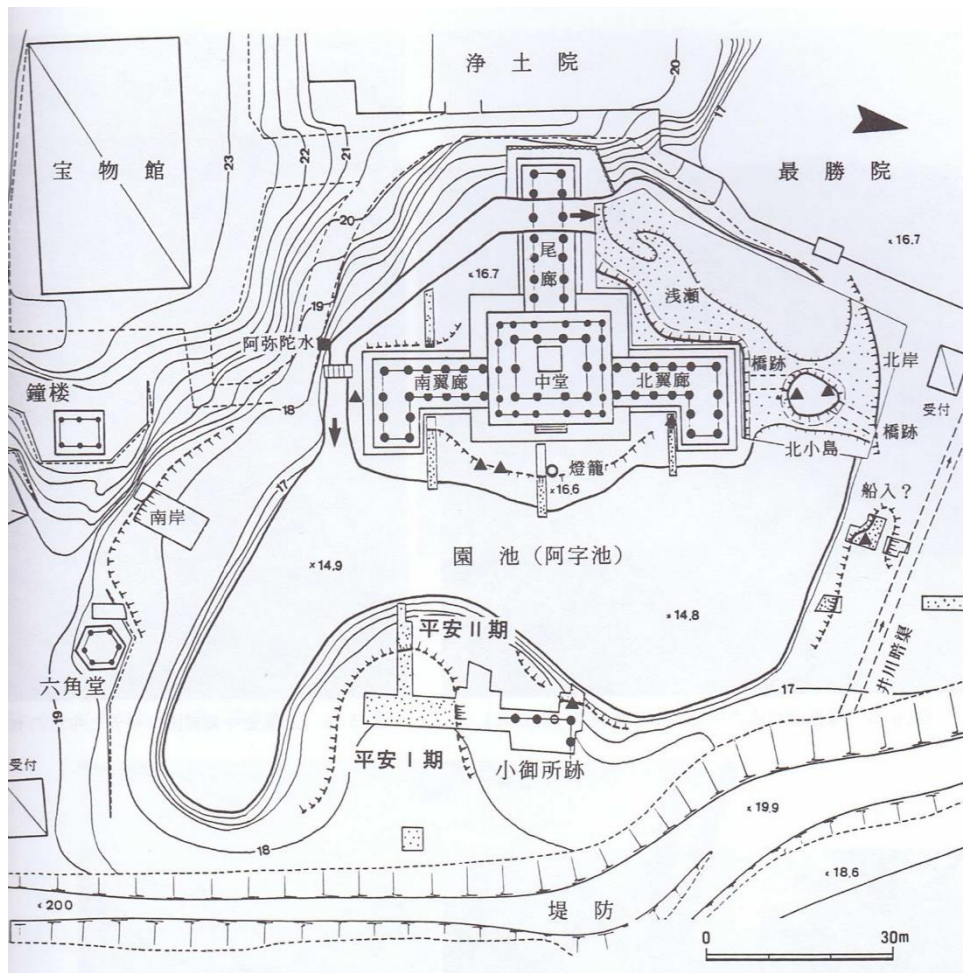
赤線赤字 筆者加筆

写真 筆者撮影 平成31年4月



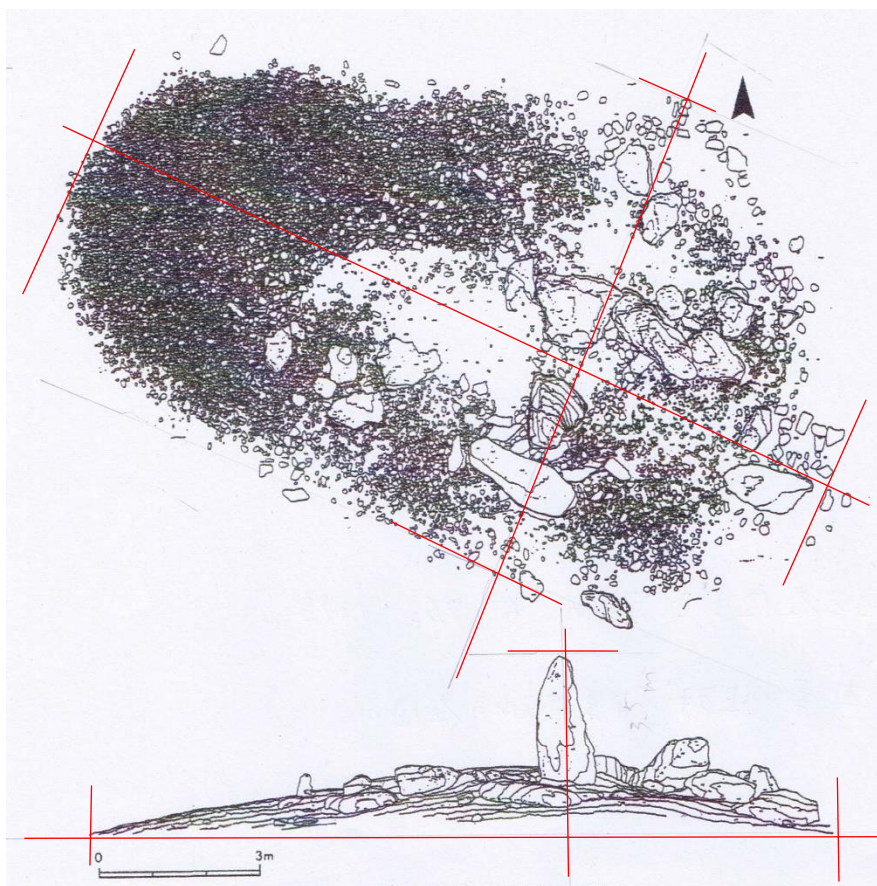
(図9) 平城宮東院庭園 上層園池北岸の石組み

写真：筆者撮影 平成31年4月



(図 10) 平等院庭園 検出遺構の概略図

出典：奈良国立文化財研究所『発掘庭園資料』（史料第 48 冊）1998 年より転載



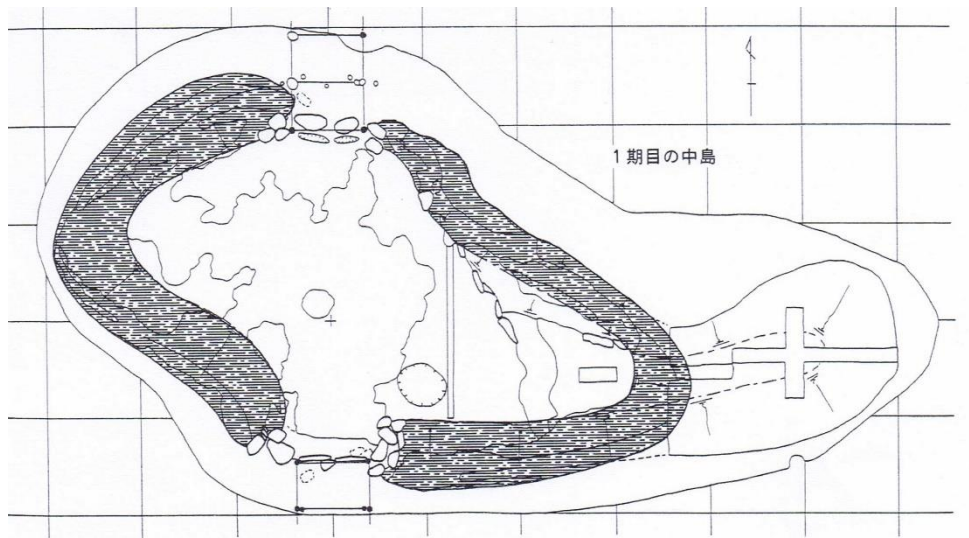
(図 11) 毛越寺庭園 池中立石

出典：平泉町教育委員会『特別史跡特別  
名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第 13  
次調査—岩手県平泉町文化財調査報告書  
第 26 集』平泉町教育委員会、1991 年  
より転載

赤線赤字 筆者加筆

写真 筆者撮影 平成 30 年 7 月





(図 12) 毛越寺庭園 中島 (1 期目)

出典：平泉町教育委員会『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第 13 次調査—  
岩手県平泉町文化財調査報告書第 26 集』平泉町教育委員会、1991 年より転載。

写真 筆者撮影 平成 30 年 7 月

(表2) 『古事記』にみる島と國と名

島名	國名	名
サ ワケノ 狭別島（淡路島）		
イ ヨ    フタナノ 伊豫の二名島（四国）	イ ヨノ 伊豫國	エ ヒ    メ 愛比賣
	サヌキノ 讃岐國	イイヨリヒ    コ 飯依比古
	アワノ 粟國	オオ    ツ    ヒ    メ 大げ都比賣
	トサノ 土佐國	タケヨリワケ 建依別
オ    キ    ミツゴノ 隠伎の三子島（隠岐）		アメノオシコロワケ 天之忍許呂別
ツクシノ 筑紫島（九州）	チクシノ 筑紫國	シロヒワケ 白日別
	トヨ 豊國	トヨヒ    ワケ 豊日別
	ヒノ 肥國	タケヒムカヒトヨク    ジ    ヒ    ネ    ワケ 建日向日豊久士比泥別
	クマソ 熊曾國	タケヒ    ワケ 建日別
イキノシマ 伊伎島（壱岐）		アメヒト    ツバシラ 天比登都柱
ツ 津島（対馬）		アメノサデヨリヒメ 天之狭手依比賣
サドノ 佐渡島（佐渡島）		
オオヤマトヨアキツ    シマ 大倭豊秋津島（畿内）		アマ    ヌ    ソ    ラトヨアキツ    ネ    ワケ 天御虚空豊秋津根別
オオヤシマグニ 大八島國（上記の八島）		
キ    ビ    ノ    コジマ 吉備兒島（児島半島）		タケヒカタワケ 建日方別
ア    ツ    キジマ 小豆島（小豆島）		オ    オ    ノ    デ    ヒ    メ 大野手比賣
ヒメジマ 女島（姫島か）		アメヒトネ 天一根
チカノ 知訶島（五島列島）		アメノオシオ 天之忍男
フタゴノ 兩兒島（長崎県男女群島）		アメフタヤ 天兩屋
アキツシマ    アキツ    シマ 蜻蛉島、秋津洲（日本列島）	倭の國	
大八洲（日本列島）	倭の國	生島神・足島神(一対) *

参考文献：倉野憲司校注『古事記』岩波書店、1991年

イクシマ    オオヤシマノミタマ  
\*「生島これ大八洲霊」『古語拾遺』807年成立

◆難波津  
(港)

★難波宮所在地  
上町台地

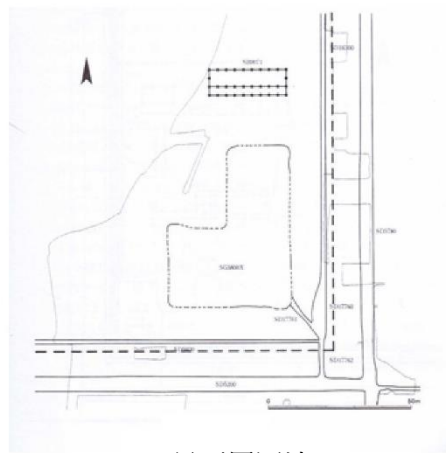


(図 13) 古代の難波

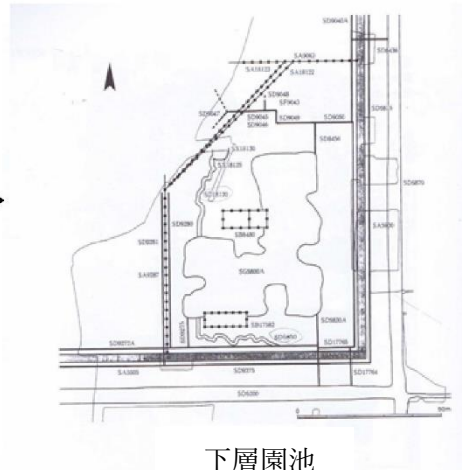
出典：浪華古図 大阪天満宮御文庫所蔵

原図は北が左側になるものを上にして掲載し赤線赤字を筆者が加筆

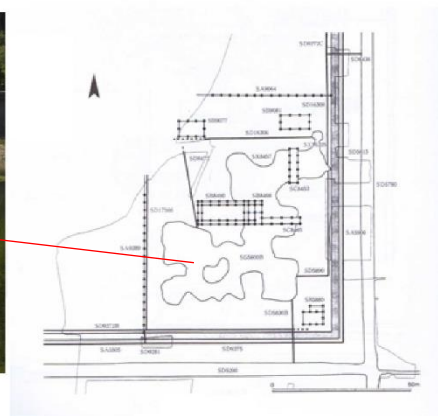




最下層園池



下層園池



上層園池

(図 14) 東院庭園の変遷

出典：奈良文化財研究所『古代庭園研究Ⅰ』より転載

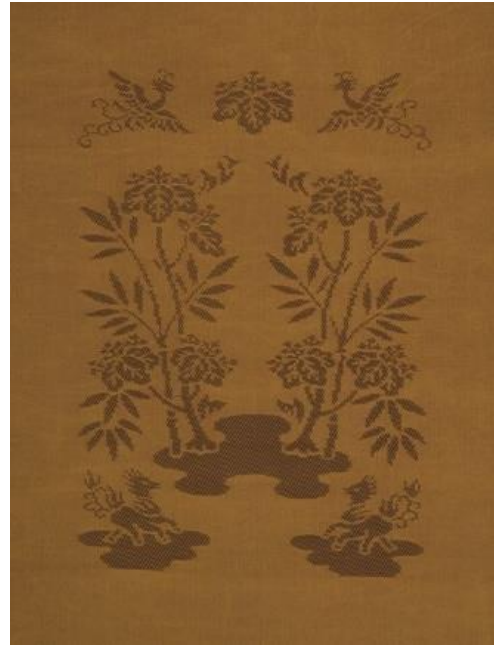
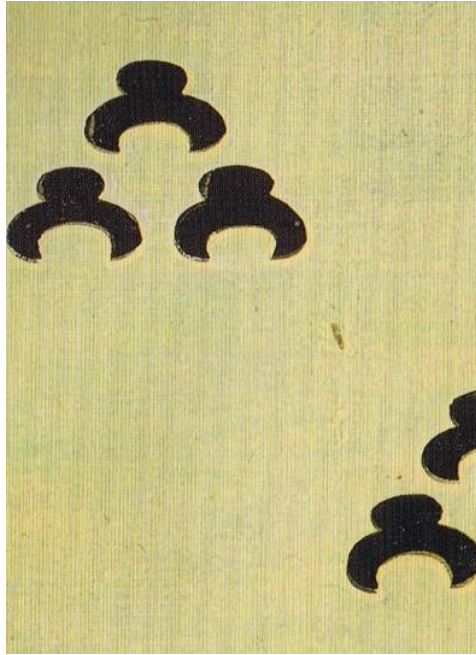
レイアウト・赤線 筆者

下左の写真 筆者撮影 平成 31 年 4 月



(図 15) 島台 (州浜台)

出典：『広辞苑第2版補訂版』岩波書店、1976年【州浜】の項より転載。



(図 16) 州浜形と黄櫨染御袍の州浜紋

左 州浜形 出典：尚学図書編『文様の手帖』小学館、1987 年

右 黄櫨染御袍の州浜紋「桐竹鳳凰」

出典：風俗博物館 HP <https://costume.iz2.or.jp/color/480.html> (2019 年 11 月 23 日検索)

## 'Island' and 'Suhama' of ancient Japanese Garden

Animism is thought or sense of ancient people viewing nature environment. Japanese Garden had embraced foreign thought like Buddhism, Zen, Shinsen-idea, etc. It suggests Japanese Garden have constitution for accepting religious thought. I have thought it is Animism. The purpose of this article is making clear the Animism underlie Japanese Garden, especially 'Island' in garden.

In previous article, I sought the original figure of Japanese Garden. It is landscaped space for ancient divine service. It suggests Japanese Garden is spiritual space which have spiritual character or quality originally.

There are three prime items 'Stream' 'Suhama' and 'Stone arranging'. Ancient divine service had been executed nearby the 'Stream' or seashore for drawing saint water and throwing goods into water. 'Suhama' was stage for divine service. 'Stone arranging' is most traditional work built in garden with spiritual things.

Formation of 'Island' had been main event of Japanese Garden since the 7<sup>th</sup> century culture of ancient China and Korea introduced into Japan. Comparing the real form of 'Island' in Japanese Garden to Chinese original image, it is recognised Japanese Garden's 'Island' is lower or flatter than Chinese original image.

I picked up Japanese Island image in ancient books.

In "Kojiki", 'Islands' were borne by parents Izanagi and Izanami, and given each spiritual name other country-name. Also 'Islands' were inseparable from country.

In "Manyoushu", 'Island' means 'garden'. It was inseparable too.

In "Sakuteiki", 'Suhama' is a variation of 'Island'. These facts suggest that 'Island', country, garden, 'Suhama', these were inseparable. It is reflected that Japan is Islands country have many 'Suhama' by steeply landform. Both of 'Suhama' and 'Island' have images of country, because 'Suhama' become flatter Island be able to live. It is auspicious. On the 'Island' or 'Suhama' spiritual something lives, ancient people had kept plaing divine service. It is animism underlie 'Island' in garden.

At ancient Naniwa(modern Osaka) had been formed by many 'Suhama' by flowing into Osaka bay. There was the palace 'Naniwa-nagara-toyosakinomiya' in the 7<sup>th</sup> century. In the 8<sup>th</sup> century, Emperor Shoumu revived Naniwa-palace with his wish. The other side, same time, at the Heijo palace in Nara, Toin Garden were remodeled to natural shape garden from simple square pond garden. It was amazing change 'Suhama' and 'Island' appeared, called establishment of Japanese Garden. Toin Garden was reflected auspicious landscape of Naniwa, probably.